

ONSA ニュース

No. 20-1

平成 22 年度通常総会を終えて	1
第 4 1 回放射線科学研究会より	2
第 4 4 回 UV / EB 研究会より	7
第 27 回「みんなのくらしと放射線展」開催の お知らせ	12

社団法人 大阪ニュークリアサイエンス協会
〒541-0057 大阪市中央区北久宝寺町2-3-6
TEL 06-6262-6540, FAX:06-6262-6541
e-mail: onsa-ofc@nifty.com
URL: <http://homepage2.nifty.com/onsa/>
発行:平成 22 年 7 月

平成 22 年度通常総会を終えて

事務局長 藪下 延樹

5月24日(月)大阪大学中之島センターにおいて平成22年度 ONSA 通常総会を終了致しました。出席されなかった会員各位のために、通常総会及び交流会の内容を簡単に紹介します。

通常総会は、大嶋専務理事の開会宣言を皮切りに、八木誠会長の挨拶、本総会への参加者数の確認(正会員 74 名で委任状を含めて出席者 56 名)と進み、議長に八木誠会長を選出した。

続いて、八木誠議長の進行で以下の議事が進められた。

議事録署名人の選出:遠藤睦雄、宮地秀和氏が指名・委嘱された。

第1号議案・平成21年度事業実施状況と収支決算等(案)について藪下事務局長と小南局長補佐から以下の説明があり質問なく承認された。

a. 会員数の変動: ±0(昨年度実績比 法人会員-1、個人会員+1、賛助会員 ±0)

b. 広報活動:

放射線展(他の協会等との共催事業):8月13日~16日の4日間キッズパークで開催された。参加者数は15,264名で昨年比-191名であったが、例年通りの参加者密度であった。

ONSA ニュースの発刊 4 回(例年通り)

ONSA ホームページの閲覧数は年間約6,000件で順調に伸びている。

c. 技術研究会等開催事業:(ONSA 単独事業)

放射線科学研究会 3 回、UV / EB 研究会 3 回、放射線利用総合シンポジウム 1 回、見学会 1 回を

開催。計 8 件、292 名(昨年度実績比 +6 名)。

d. 研究調査事業(受託研究)等:3 件(ほぼ例年通り)

e. 大阪府立大学コバルト 60 ガンマ線照射業務
大阪府立大学との受託契約に基づき、協会職員 3 名(照射業務担当 1 名、受付業務担当 2 名)を派遣した。

f. 収入合計:24,876,207 円(予算比+186,207 円)

g. 支出合計:24,464,111 円(予算比-491,879 円)

h. 当期収支差額:+412,096 円
(予算比+678,086 円)

i. 当初予算では、約 26 万円の赤字予算を組んでいたが、関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団からのシンポジウム開催助成金収入等により黒字となった。

j. 支出計上した“25周年記念事業積立金”100万円/年は3年目となった。

監査結果の報告:辻本監事から友近公認会計事務所の監査報告書に基づき、「適正」の報告。

第2号議案・ONSA 賞に関する件(案)について大嶋専務理事から説明があった。ONSA 賞は「25周年記念事業」として前倒して復活するもので、68万円の予算を計上した。第2号議案について、質問はなく承認された。

第3号議案・平成22年度事業計画(案)と予算書(案)について藪下事務局長と小南局長補佐から説明があった。内容は「25周年記念事業積立金を例年通り計上」し、大阪府立大学からの受託料

が減額されるために縮小予算となっている。

a.事業計画内容は、会員数の減少が見込まれるので、縮小均衡型で、b.のガンマ線照射事業以外は、ほぼ例年通りである。

b.事業収入は大阪府立大学から受託のガンマ線照射事業が、平成 22 年度では約 116 万円減額となり、大幅の減少が見込まれる。

c.支出計上した“25 周年記念事業積立金”100 万円 / 年は 4 年目となった。今年度は第 2 号議案により 68 万円の予算執行を計画している。今年度はこの結果 991,483 円の赤字予算である。

d.収入合計:22,542,000 円
(前年予算比-2,148,000 円)

e.支出合計:23,533,483 円
(前年予算比-1,422,507 円)

f.当期収支差額:-991,483 円
(前年予算比-725,493 円)

第 3 号議案について質問はなく承認された。

第 4 号議案・新理事に関する件(案)について大嶋専務理事から説明があった。第 4 号議案について、質問はなく承認された。

第 5 号議案・情報公開(案)について大嶋専務理事から説明があった。これは協会の HP 等におい

て下記の内容を公開することが義務付けられたために、会員に諮った。

社員(会員)名簿:会員数

財務諸表:正味財産増減計算書、財産目録
第 5 号議案について、質問はなく承認された。

以上で、通常総会の議事が予定通りに終わった。

最後に今期で退任となる八木誠会長より退任の挨拶と、後任会長に豊松秀己氏(現関西電力常務取締役)が就任する旨報告があった。

引き続いて、交流サロンにて、参加者ほぼ全員約 50 名による交流会が開催された。

交流会は、八木誠会長から開会のご挨拶と、豊松秀己新会長の紹介があり、続いて豊松新会長より挨拶があった。その後、谷口良一教授(大阪府立大学産学官連携機構先端科学イノベーションセンター)の乾杯の発声により、懇親の宴に入った。豊松秀己新会長、八木誠前会長(関西電力代表取締役に内定)には最後までお付き合いいただき、有益な交流会を滞りなく終了することができました。これも偏に会員各位のご協力の賜物と、ここに厚くお礼申し上げます。

第 41 回放射線科学研究会より

研究会は平成 22 年 4 月 23 日(金) 13:30 から 17:30 まで住友クラブ(大阪市西区江戸堀)で開催した。今回の講師は鹿園直哉氏((独)日本原子力研究開発機構)、中野朝雄氏((株)リガク)、笠井亮秀氏(京都大学大学院)、菊池 清氏(セン特殊光源(株))の 4 名の方々であった。

1. 放射線によるクラスターDNA 損傷とは何か?
(独)日本原子力研究開発機構量子ビーム応用研究部門 DNA 損傷修復・細胞影響研究グループ
鹿園 直哉

電離放射線が致死、遺伝子突然変異、発がん等の生物影響を誘起することはよく知られている。放射線によるこれらの生物影響の原因として「クラスターDNA 損傷」という概念が提唱されてきたが、その実体については明らかではなかった。鹿園講師は、本講演で最近のクラスターDNA 損傷研究の現状について紹介した。最初に、なぜ放射線の生物影響に関してクラスターDNA 損傷という概

念が提唱されるに至ったのかについて、これまでの研究背景が紹介された。放射線の生物効果を確率論的概念を導入し定量的に説明する試みとして確立されたのが、ヒット理論(または標的理論)である。細胞内の標的が放射線によってヒットされることによって不活性化すると仮定し、ヒット数(n)がポアソン分布に従うと考えると、放射線による生物効果の定量的解析が可能であり、この理論が放射線の生物作用機構研究の基盤となった。

一方、細胞の生存率曲線や染色体異常の線量反応に見られる非線形効果(低線量域で“肩”が生